

# 生存科学研究ニュース

VOL. 14. NO. 3 1999. 5. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518

## 3 役員の抱負

去る4月20日の理事会において選出された役員から次の抱負が寄せられました。

理事長 江見康一



このたび由緒ある生存科学研究所の理事長として、再度選出されましたことを、光栄に思うと同時に、責任の重さを痛感しております。2年間の任期中に、21世紀を迎えることになりましたが、新しい世紀は、人類生存の可否について、重大な警告を投げかけています。私たちは小なりとはいえ、研究所創設時の志を思い起こし、与えられた課題への取組みにおいて、良きイノベーターの役割を果たしたいと願っております。皆様のご支援を切にお願いいたします。

副理事長 大塚正徳

この度、思いがけず理事に選任され、さらに副理事長のご指名を受け、責任の重さを痛感しています。私は元理事長の熊谷洋先生や評議員の江橋節郎先生の下で薬理学を学び、



5年前退官するまでは東京医科歯科大学で教授をしておりました。生存科学についてはこれから勉強するところですが、数百万年続いた人類の生活様式が最近の数千、数百、数十年の間に急激に変貌している現在、当研究所の目指す事業は大変重要ではないかと思えます。江見理事長を補佐して当研究所の発展のためにお役に立ちたいと願っています。

専務理事 鈴木雪夫



この度、専務理事の大役をお引き受けすることになりました。江見理事長をはじめ大塚副理事長、常務理事の青木・川崎・小島・師岡の皆さんと力を合わせて、生存科学研究所を支え、また、武見太郎先生の生存の理法、生存科学の研究に私なりにできるだけの努力をいたす所存であります。宜しくお願い申し上げます。

## 平成11年度事業計画

平成11年度の事業計画は3月9日の第3回理事会で審議され下記のとおり決定した。

### 自主研究事業

- ・川崎病研究会
- ・生存学研究会
- ・21世紀医療システムのあり方研究会
- ・21世紀世界の文明と生存の研究
- ・中高生における行動上の個人別指導のための性格・気質分類の基本指針「パーソナリティ」
- ・銀座ナイトセミナー「生きる」シリーズ

### 協同研究事業

- ・レオンシェフ文庫

### 広報事業

- ・生存科学講座
- ・生存科学研究ニュース

### 学術研究誌「生存科学」発行事業

### 受託事業

- ・個人毎の健康度と疾病リスクの研究
- ・地球環境リスク管理研究

## 平成10年度第2回評議員会

平成10年度第2回評議員会が平成11年3月15日（月）に、同継続評議員会が3月20日（火）生存科学研究所会議室で開催された。出席者は19名（委任状を含む）、23名（委任状を含む）で、向山定孝評議員が議長に就任し、以下について審議された。

①平成11年度予算案について

②平成11年役員選任について

審議の結果①について了承され、②については理事13名、監事2名が選出された。

## 平成11年度第1回理事会

平成11年度第1回理事会が4月20日（火）午後2時から生存科学研究所会議室において開催された。

出席者は13名（委任状を含む）で、江見康一氏が議長に就任し、次の事項について討議がなされた。

①執行部人事について

②評議員選任について

③その他

審議の結果、新執行部は下記のとおり決定。

（敬称略、アイウエオ順）

理事長	江見康一	一橋大学名誉教授 帝京大学名誉教授
副理事長	大塚正徳	日本学士院会員 東京医科歯科大学名誉教授
専務理事	鈴木雪夫	東京大学名誉教授 多摩大学大学院研究科長
常務理事	青木清 川崎富作	上智大学教授 日本川崎病研究センター所長
理事	小島静二	小島クリニック院長
	師岡孝次	東海大学教授
	梅園忠 ト部文麿	千葉県医師会副会長 ト部医院院長
	大林雅之	山口大学医学部教授
	津谷喜一郎	東京医科歯科大学難治疾患研究所情報医学研究部門助教授
監事	藤原成一	日本大学芸術学部教授
	福井光壽	福井クリニック理事長
	大内幸夫 小川春男	経済評論家 亜細亜大学教授

②評議員の選任については、本日の審議をふまえて後日、決定することとした。

## 平成10年度 第1回生存科学研究会3支部合同公開討論会

生存科学研究所主催、平成10年度第1回生存科学研究会3支部合同公開討論会が、平成

11年3月7日(日)午後2時より京都パークホテル「エリゼ」において開催された。テーマは『滅びるか地球』であった。当日は日高敏隆生存科学研究会代表は都合がつかず欠席、代って代表補佐の精神科医のト部文麿、大正大学教授の藤井正雄の司会・進行のもとに行われた。

はじめに、3支部を代表して、北陸支部からは那谷寺住職の木崎馨山氏が「アニミズムの世界から(自然崇拜・山岳信仰・白山信仰)」のテーマで、近畿支部からは花園大学教授の立花吉茂氏が「植物の世界から」と題して、最後に中国支部からは山口大学医学部医療環境学教授の大林雅之氏が「生存倫理の世界から」のテーマで、それぞれ提言を行った。

木崎氏はアニミズムの概念枠をまず明らかにしてから、古代からの信仰の背景には輪廻転生の世界観が息づいていたこと、また、仏教の祖師たちの入我我入、自然法爾といった考えを挙げ、自然環境保全を教える古人の教えに今こそ耳を傾けるべきであることを訴えた。

立花氏は環境問題を地球レベル、国レベル、都市レベルに分け、植物の世界の輪廻転生の様相を語った。国レベルを例にすると、日本の自然環境は他国と比べると緑が豊かであるのは、鎮守の森に象徴されるように神霊が樹木に宿るとする古代からの信仰に支えられてきたからである。雑木林におおわれた里山を大切に、人と自然との共生を図ってきた知恵を今こそ学ぶ時であると力説した。

大林氏は、先端医療技術の進歩によって人類にもたらされた生命観の混乱を指摘し、慎

重な対応を訴えた。とくに生殖医療の進歩、体外受精の問題を取り上げ、生命の技術化が本来人間の持っていた生命観を崩壊させている状況を訴え、新たな生命観の構築が迫られていることを語った。

以上三氏の提言発表の後、時間一杯まで活発な自由討論がかわされた。研究会を講演形式にしてはという意見もあったが、今回のように参加者が各個人が納得するまで発題者に質問し、十分に理解するまで自由に話し合うといった場にしたのは大成功であったというのが参加者一同の感想であった。いずれ詳細な報告書を作成することを約して解散した。

たまたまスリランカの国際学会で生命倫理の問題を述べて帰国したばかりであったので、環境問題について一言述べておきたい。スリランカの中央部は文化三角地帯として知られる仏教文化の遺跡地区として有名である。その一つの遺跡地区アヌラダプラを仏教聖地に位置付けているのはスリー・マハー菩提樹で、紀元前236年にインドのアショーカ王の王女サンガミッタがインド・ブッダガヤの菩提樹の分け木をここへ運び、時のデーワナンピヤ・ティッサ王が植樹されたと言いつた。入口に大きな看板があり、紀元前247年6月の満月の日にミヒンターレの地でアショーカ王の王子マヒンダがデーワナンピヤ・ティッサ王に語った言葉の一節が英文で書かれている。訳して見ると、次のとおりである。

「陛下よ、空中に舞う鳥たち、森林を彷徨する動物たちは、陛下と同様にこの国の地に住み、自由に移動する同等の権利を持っています。国土は人々や他の全ての生き物に属す

るもので、陛下はその管理者に過ぎないのです。」

デーワーナンピヤ・ティッサ王はこのマヒンダ王子との問答の後、仏教に帰依したとされている。まさに、この研究会の結論とも言うべき共生の考えが、地球の滅亡を阻止する唯一の道であると確信した次第である。

(藤井正雄記)

#### 第1回 銀座ナイトセミナー報告

第1回銀座ナイトセミナー「生きる」シリーズが、1999年4月22日(木)18時より、生存科学研究所会議室にて行われた。本セミナーは、「生存科学」を振り回さずに、黒澤明監督の映画「生きる」からタイトルを借り、各々の立場から「生きる」ことの意味を自然に問うものであり、第1回は「科学史家の『生きる』」と題し中山茂氏(神奈川大学教授)が科学史の立場から報告された。

中山氏は映画「生きる」から、まず、ターミナルケアの告知の問題について言及された。かつては告知はしないのが当たり前であり、死を意識させない方が良くと考えてきた。しかし、80年代以降、医療技術の発展により、がんの延命が出来るようになったこともあり、患者の納得が必要となり、死の迎え方が変わってきたのである。

占星術では、人は生まれたときに死が決まる。そして、多くの人は予測された死が近くとノイローゼになったようだ。死が予測される社会は暗いのである。そこで、現在、占星術士の組合では死の予言はしないという決まりをProfessional Ethicsとしてもっている。一種の決定論である占星術によって人生が支

配されることを多くの人は好まないが、近年、死が予測された方が人生の予定が立てられてよいと考える学生もアンケート調査ではでてきたという。死に対する用意が世の中に出回ってきたともいえるであろう。

科学史から考えると、17世紀のニュートン以降、力学的機械論によって、全てが解明されるというパラダイムがあった。時計の構造に代表されるこのパラダイムはスーパーパラダイムともいえるもので、その後、力学から物理学、分子生物学へと展開していく。我々はこれらの機械論的進歩に慣れてしまっている。しかし、生物学は別のパラダイムであり、近年の複雑系という言葉に見られるように、機械論では説明できない。中山氏は、「生命現象としての『生きる』ことは機械論では解明できない複雑な現象である」とした。

さらに、中山氏の報告に対して、各々の立場から活発な議論がなされ、非常に有意義なセミナーであった。

(津谷喜一郎・掛江直子)

#### 研究所日報

- 2月6日 第4回生存科学講座
- 2月26日 第3回常務理事会
- 3月7日 生存科学研究会3支部合同公開討論会
- 3月9日 第3回理事会
- 3月15日 第2回評議員会
- 3月30日 第2回継続評議員会
- 3月24日 生存科学研究会北陸支部講演会
- 4月20日 平成11年度第1回理事会
- 4月22日 第1回銀座ナイトセミナー